平成29年（2017）
阿づまの光
9月号・Septembro

教主さまお作　灰釉茶盌　銘「松寿」

【金龍海大八洲土　二代教主さまお手植え神島松釉】

題字出口直日

通巻第582号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子恒
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

弥勒（みろく）の代（よ）はや近（ちか）づきて彼方（あちこち）此方に
山霊明光放（さんれいめいこうはな）ちそめたり

出口王仁三郎聖師

日々の散策で神様にごあいさつ

祭務課長　高野春樹

休日は、体調管理のためにも、なるべく散歩に出掛けるようにしています。最近は、諸般の事情により、午後にお休みを頂いて歩くことが多くなりました。過日、千葉県市川市を目指して出発したのですが、途中で断念し、新小岩駅周辺を散策して帰ってきました。半日では、頑張って歩いても20数キロが限度です。

先日、一日お休みを頂くことができ、国道4号線をひたすら北進、「クレヨンしんちゃん」で有名な埼玉県春日部市まで行きました。距離にして40キロ弱。真夏にこんなに歩くのは危険ですが、割合涼しく熱中症にならずに済みました。

散歩をしていますと、神社を多く見かけますので、できるだけ参拝（ごあいさつ）するようにしています。関東に多いのは浅間神社、天祖神社、八幡社などですが、大宮の氷川神社は大変立派でした。明治神宮、靖国神社や神田明神など有名な神社へは東京に来た早々に参拝させていただきました。先日は下谷の三島神社、南千住の素盞雄神社、春日部の秋葉社に参拝しました。

私が住む京都府亀岡市紺屋町にも秋葉神社が祀られていて、9月と12月に祭典を行っています。秋葉神社の本宮は静岡県浜松市にある秋葉山にあり、火伏せの神として知られています。江戸中期に亀山藩主と浜松藩主が入れ替わったことがあり、亀山城下に火事が相次いだ折に、藩主が秋葉神社の勧請を許され祀られることになったそうです。秋葉原にも秋葉神社がありますが、もともと秋葉原は江戸の町の火除け地、つまり火事が起きた時に類焼を防ぐ場所という機能をもっていました。私がよく出掛ける松が谷にも秋葉神社があり、親しみを感じて参拝しています。

神社によって祭神が異なりますし、神々しい雰囲気の中で、ありがたい気持ちになることもあります。これからも機会を見つけて〝おさい銭〟を持参し、「ごあいさつ」に立ち寄らせていただきたいと思います。

死後の世界

～人はなぜこの世に生まれたのか～

自分はなぜ生まれたのか？　人生とはなんのか？　死んだらどうなるのか？
すべての人がいずれ迎える“死”。その向こうにあるものは？　死後の世界を知ることは、とりもなおさず生きることの意義を知ることにつながります。

一般には、私たちがいま住んでいる世界を〝この世〟、現界と言い、死んでからの世界を〝あの世〟、霊界と呼んで区別しています。人が亡くなり、人間の魂＝精霊が肉体から離れた瞬間から、霊だけの世界に入るので、死後＝霊界という考えが一般的だと思います。

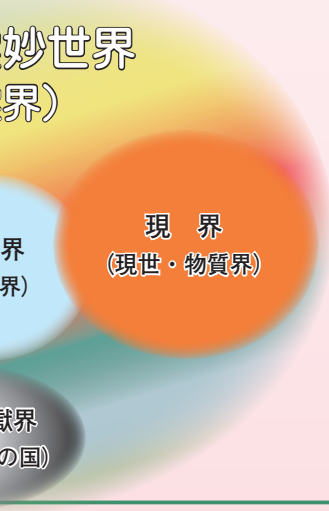
ところが、大本の教祖・出口王仁三郎聖師は、今皆さんが生きているこの現界も、亡くなった先の世界、そして神の世界も、すべてを総称して〝一大霊妙世界〟すなわち霊界であると示されています。それは、この世もあの世も一体であり、実は密接不離につながっているからです。

〝うつしよ〟と〝かくりよ〟

例えば、この世は現世（げんせ）または〝うつしよ〟と呼ばれます。これは、現（うつつ）とか写世（うつしよ）、この世に霊界が移写しているからです。あの世と呼ばれる世界は、幽世（かくりよ）・隠世（かくりよ）ともいわれ、幽（かす）かに見える世界、隠れている世界だからです。

〝うつしよ〟という言葉の通り、霊界の事象は全て現界に映り、現界で起こったことは霊界に現れ、それぞれ相応していて、お互いに影響しあっているわけです。霊界と現界は合わせ鏡となっており一体ともいえるのです。

次に、人の生と死について説明してみましょう。現世（うつしよ）と幽世（かくりよ）が一体であるように、私たち人間も、霊的存在である精霊体と、体的存在の肉体とが一体となって生きています。ここのところを、聖師は、神からいただく情的愛が力となって、精霊体と肉体が〝魂（たま）の緒（お）〟で強く結ばれ、精霊と肉体の和合をもって生命活動していると説明しています。



特に、心臓が神からの愛に満たされて活動しており、心臓の活動がすべて止（や）んだとき、さらに肺臓の機能が完全に停止したとき、〝魂（たま）の緒（お）〟が途切れ、精霊は肉体から離れて霊界に旅立ちます。これが現界的には肉体の死であり、霊界においては魂の世界に戻る、つまり〝復活〟と言います。

人は死んだらどうなるの？

では、人が亡くなった後、どのような経過を経て天国へと旅立つのでしょう。

肉体から離れた精霊は、極善人と極悪人を除くほとんどの人は、まず〝中有界（ちゅうゆうかい）〟という、霊界の中の天国の入口とでも言うべき境域に進み、自身の魂の徳に相応した天国に進む準備をします。

自身の魂の徳といいましたが、生前の努力や精進や失敗、苦悩、苦労や反省などによって、その人の本質とでもいえる愛や智慧、証覚などが培い育まれ、霊界では天人＝精霊として復活し、その個性を発揮するのです。

ところが、霊界に復活してすぐの精霊は、肉体を持っていた時と同じような外見に包まれ、気持ち・感情もさほど変わらず、容姿も亡くなった時と同様で、幼児は幼児のまま、青年は青年、老人は老人の姿のままで復活します。

ですから、亡くなってすぐに目に見える景色も、現界とほとんど変わりません。このため、すぐには自分が死んだことを悟ることができない精霊もいます。

精霊を覆うこの外見は、本音や本心といった、魂の本質を包み隠す、ちょうどオブラートのようなものです。中有界での最初の段階では、なかなか心に思う愛情や正義心、また悪意や虚偽といった邪な心が、このオブラートによって表面上には現れません。

また、その人がこの世で生きてきた記憶、学識、免許証などの資格や社会的地位、賞罰などは、このオブラートの部分にあたり、霊界での生活に不必要なものです。

中有界では、神の導きと守護によって、時間をかけて精霊から、このオブラートが剥がれ落とされ、霊魂の本当の姿の霊身となっていきます。この過程で、死の自覚がない精霊も、自身が霊界に復活し、天国へ進む準備にあることを自然と悟らされます。

外見も、生前とは全く異なる姿に変わってゆきます。男性は30歳ぐらい、女性は20歳ぐらいとなり、表情もその内面の愛情と智性に相応し、主神の善と真に満たされた霊身は美しく、悪と偽りに満たされた霊身は醜い姿へと変貌します。

この準備期間は、現界的には50日間とされ、長くても30年以上は滞在しないとされています。

霊魂の準備が整うと、俗に閻魔大王と呼ばれる幽界の神に、霊界の関所で生前の全ての行いや魂の向上度合いが審判され、進むべき天国が決定されます。また、極善・極悪の魂は、この審判の過程を経ずに、進むべき霊界へと直行します。

現界的には、この50日間の追善供養が、

～21世紀・生きがい講座～

柿崎　哲男（愛善宣教課主任）

亡くなった魂の向上へとつながり、より高い霊界への復活の後押しとなる重要な期間です。

大本では、新たに亡くなった人の霊魂を〝新霊〟と呼称します。遺族は新霊に対し、特に、亡くなってから50日間、手厚く新霊祭祀を行います。毎日お膳をお供えし、朝夕には新霊礼拝詞という、特別な祝詞を奏上し、新霊の〝魂〟の向上を祈念します。

天国は魂の故郷

天国は第1天国、第2天国、第3天国と、大きく3段階に階層が別れており、第1天国が最も神に近く、神の愛・熱と信・光が最も深く感じられる世界です。

天国に復活を許された魂は、神の愛情に満ちたあたたかい世界で、現界と同じように日々の生業に勤しみながら、天国天人は祭祀に仕え、あるいは霊国天使は神教宣布に勤しみ、意思想念の通じ合う同胞と、喜々として生活します。

また、霊界には、神に背を向け、自ら暗くて寒い世界に進んでしまう精霊とその世界が存在します。根の国・底の国と呼ばれる地獄界です。神は地獄界を好んではお作りになられませんが、虚偽と悪欲、邪心が強い魂は、自ら好んで、魂に相応する霊界へと進んでしまいます。

魂相応の世界にと申しましても、地獄界、根の国・底の国に落ちた魂には、やはり苦しみが伴います。しかし、地獄の苦しみは、改心の苦しみ、神が、その魂をお救いくださるための、心の洗濯のための苦しみです。どんなに神に背を向けた魂でも、神はその愛情によって、根底の国から救済してくださるのです。

人はなぜこの世に生まれたのか

肉体の死は、同時に魂の霊界への復活と説明してきました。再び霊界に復活するのであれば、あえてこの世に生まれなくとも、ずっと幸せな霊界、天国で暮せばそれで良いかもしれません。しかし、人はこの世に生を受けます。神さまからこの世に生まれさせられるのです。

なぜでしょうか。

肉体は、精霊の魂の養成所ともいわれます。人間が人間社会で生きていく人生の過程が、魂の修養です。

現世と幽世を、生き変わり死に変わり繰り返しながら、魂を向上させ、より神に近い世界の住人となることが、人がこの世に生を受けている理由といえます。

現界は玉石混交といいますが、霊界で決して出会うことのできないような聖人の徳にふれたり、私欲の強い人と出会ったりと、意志想念の全く異なる人との社会生活があります。現界は、さまざまな環境でお互いに磨き合って魂に徳を積み、より神に近い、高い霊界に復活するための修行場です。

天国に帰ってしまうと、御魂相応の世界ですから周囲の精霊は同じような意志想念の魂ばかりです。切磋琢磨はなかなかできませんので、魂の向上には時間がかかります。

また、人がこの世に生かされている重要な使命があります。初めに現世、幽世の話をしましたが、現界において人が魂の向上を果たし、その魂をもって霊界に復活し、さらに再びより向上心をもって現界に現れ魂の修行を積む。この繰り返しが、現界・霊界で相乗効果となって、より精神性の高い世界が築きあげられてゆきます。

現界にも天国的な社会構築を

人生には楽しいことばかりがあるわけではありません。辛いことや嫌なこともたくさん経験させられます。しかし、さまざまな試練を乗り越えてこそ、人間として成長させていただくことができ、魂も磨かれていくと思います。魂が向上すれば、すなわち良い霊界を作り上げていくことになり、霊界が良くなれば現界もより良くなっていくのです。

人は神の生き宮であり、神がお進めになる天地経綸を神の代行者となって主体的に推進し、この地上に天国を築くという大きな使命が課せられています。

そのためにも、お互いに省みつつ、相手の気持ちに大きくふれながら和合の実をあげ、神から与えられた人としての愛情を周囲に広げていかなければなりません。そうすれば、この現界に地獄的想念が無くなり、必然的に霊界にも地獄的世界が無くなって、現界、霊界ともに天国のみの理想的な世界へと向かっていくと思います。

霊界の実在を確信し、天国的な社会の構築に向けて日々励むことこそ、今最も求められていることではないでしょうか。

掲載文は、平成29年4月19日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭は8月13日、午前10時30分から、斎主・猪子恒東京宣教センター長のもと執行され、267人が参拝した。祭員は神奈川主会、伶人は二絃の会関東支部、伊都能売神諭拝読は嶋貫光喜福島主会長、添釜は東光庵にて髙野社中が担当した。

祭典後、開教百二十五年瑞生大祭での教主さまごあいさつを拝聴。引き続き東京本部を代表して猪子センター長があいさつ。浅田秋彦前大本本部長が7月31日付で退任された旨を紹介し、8月1日付で後任に横須賀分所長の鈴木穎一氏が大本本部長に、東京宣教センター長には自身が拝命したことを説明した。また、教主さまのごあいさつを受け「われわれはこのごあいさつをくり返し拝読させていただき、平和を願われる教主さまの御心に沿うよう努力させていただきたい」と述べた。

続いて、浅田秋彦前本部長があいさつ（別項）、ついで信徒代表より花束が贈呈された。

千葉主会による愛善歌と童謡の奉納

引き続き、関東教区より第20期大本総代に選出された飯田俊明氏があいさつに立ち「総代は信徒の代表として、大本本部と皆さまを結びつける大変重要なお役。信徒の活性化を考え、教団の護持発展に寄与させていただきたい」と再任の抱負を語った。

最後に朗詠の奉納、千葉主会による愛善歌「瑞声」、童謡「故郷」の奉納があり、直会に移った。

●退任あいさつ（抄）

前大本本部長　浅田（あさだ） 秋彦（ときひこ）

平成14年からちょうど15年間、本部奉仕をさせていただきました。中でも後半の6年間は東京宣教センター長として、皆さまとご神業に励ませていただきました。この間、信徒一人ひとりがみ教えの実践リーダーとして、神教を宣布していただきたいとの願いを込めて、その環境づくり、実践リーダー教本制度などに取り組んでまいりました。

大阪の地に戻りましても、神教宣布の思いを旨として、活動してまいります。

また、この東京本部は、49年前に三代教主さまが、日本、世界へ向けた宣教の中心地として強いお気持ちで設置されました。関東9主会の皆さまの横のつながりを強く結び、底力を出していただき、心を一つにして、今後とも本部を支えていただきたいと存じます。

皆さま、ありがとうございました。

第26回家庭平安祈願祭

日　時	10月21日（土）午前10時30分
場　所	東京宣教センター・ご神前
申し込み	申し込み者は信徒・一般を問いません。ご本人に代わっての申し込みも可能です。所定の申込用紙に必要事項を明記の上、祭典玉串（任意）を添えて、所属の機関、または東京宣教センター祭務課までお申し込みください。
締　切	10月16日（月）必着
その他	ご祈願は祭典後1週間執行します

21世紀・生きがい講座

第174回「21世紀・生きがい講座」は、8月16日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、加藤眞三・慶應義塾大学看護医療学部教授が「市民のための患者学」と題して講話した。参加者は20人（内、一般1人）。

講師は「現代の医療は、今、大きな転換期を迎えている」として、大量生産や大量消費、また画一的な社会から、手作りの温かさや、個性、多様性が求められ、受け入れられている現況を紹介。医療現場でも「医師に従って治療を受ける関係から、患者が医師や医療と対等に向き合う形態へと変化しつつある」と述べ、時代が求めている、新しい医療の姿への意識転換の必要性を語った。

参加者からは「患者と医療者との関係、医療情報との付き合い方など、これからの生き方について大変参考になりました」（女性・信徒）、「具体的でわかりやすく、素晴らしい講演でした。また聴講したい」（女性・信徒）等の声が寄せられた。

患者の立場にたった医師・医療の重要性を語る加藤講師

東光苑祭典・行事予定

9月

2日（土）夕拝時
神集祭遥拝（最終日・旧7月12日）

10日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・長寿感謝祭・交通安全祈願祭・秋季合同慰霊祭

11日（月）午後7時
全国一斉世界平和祈願祭

16日（土）～18日（月・祝）
東光苑道場講座

20日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講師　小藪 資史（特派宣伝使）
講題　ポテンシャルの引き出し方
～自己魂を練る～

22日（金）～24日（日）
東光苑秋季祭式講習会

23日（土・祝）午前10時30分
三代教主毎年祭（27年）

10月

4日（水）午後6時
東光苑秋をめでる夕べ

8日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

18日（水）午後7時
霊界物語全国一斉拝読会（第50回）

18日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講師　小林 善直（専業農家）
講題　正しい食、農のあり方の実践
～農道まっしぐら～

21日（土）午前10時30分
家庭平安祈願祭（第26回）